

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和元年八月二十四日(土曜日) 午後五時開演

演目解説 佐々木香織(石川工業高等専門学校准教授)

狂言 宗八(そうはち)

元料理人のわか坊主と、還俗げんぞくしたての新米料理人宗八の二人が、お金持ちに抱えられて、主人の留守中に読経と魚料理を命ぜられます。互いに相手の不慣れを見かねて、元の仕事を教え合ううちに、一人は鯛を手に読経、もう一人は経を手に料理を習い、その姿を帰宅した主人に見られて追い込まれます。本来相容れない読経と生臭料理なまくさの境界を屈託なく越えて転職するこらえ性のなさ。そして身に付けた技の愉悦ゆえつはどうでしょう。

能 野守(のもり)

大峰葛城おおみねかづらきをめざす羽黒山の山伏(ワキ)が、和州春日の里で野守の老人(前シテ)に出会い、由緒ありげな水のいわれを尋ねます。老人は野守の鏡という名の由来を、老人のような野守が姿を映すからとも、まことは昔鬼神が持った鏡ともいうと教えます。鬼は昼は人の姿で野を守り、夜は鬼となって塚に住んだとか。老人は昔の自分を懐かしみ、「はし鷹の野守の鏡」の故事も語ります。それは野守が鷹狩の帝と言葉を交わし、面目を施した思い出です。鬼が持つまことの鏡は見るのも恐ろしかろうと言い、老人は塚の中へ入ってしまいます(中入)。山伏は法力を頼み、鬼が持つ鏡を見たいと全力で祈ります。火花の散り輝く大鏡を持つて鬼神(後シテ)が現れます。山伏は鏡を正視できず、恐れながらも、鬼神を引き留めて祈祷を続けます。山伏の行徳に引かれた鬼神は、無限の宇宙と罪罰のすべてを映し出す鏡の威徳を示した末に、鏡を山伏に与え大地を踏み破って奈落の底へ帰ります。 西村 聡(金沢大学人間社会研究域教授)

前シテ(野守の翁) 鬚髪ひげかみをつけ、三光鬚さんこうす又は朝倉鬚あさくらす或は笑鬚わらいすの面をかける。無地熨斗むじのしめ目を着附に着、上に水衣みずぎを着て、腰帯こしおびをしめる。(持物、杖)

後シテ(鬼) 赤頭あかがしらをつけ、唐冠とうかんむりをいたゞき、小瘧見こべしみの面をかける。厚板唐織あつぱんからおびを着附に着、半切はんぎれをはき、上に袷法被あわせはっぴを着て、腰帯こしおびをしめる。(持物、扇あおぎ、鏡かがみ)(没着胴もぎどうの場合もある)

(午後七時頃終了予定)